
続・山手線の女

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・山手線の女

【Nコード】

N8490I

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

私は品川駅近くに住む作家だ。日課の散歩をしていると、妙な女性に出会った。

私は品川駅付近に住む作家。

但し、誰も私が作家だという事を知らない。

それくらい売れていないし、顔出しもしていないのだ。

私はいつものように日課の散歩をし、午後三時を回った頃、品川駅の高架下に出た。

「おや？」

道の先に若い女性が立っている。上から下まで黒尽くめだ。

よく見るととても綺麗な方である。

しかし、その佇まいは、何とも言えないほど奇異であった。

何がそう感じさせるのかと考えてみたが、何となくとしか言いようがなかった。

不思議な人だな、と思いながらも、ジロジロ見るのは不躰だと判断し、彼女から視線を外し、通り過ぎる時に軽く会釈をした。

「品川」

その女性は不意に私の背中に向かってそう呼びかけた。

「はっ？」

私は実は苗字が品川なのだ。呼ばれた気がして振り向いた。

既知の人だったかと記憶の糸を手繰ってみたが、どうにも思い出せない。

「品川」

それにしても失礼な人だ。どう見ても私の方が年長者なのに、呼び捨てにするとは。

「君、失礼だよ。年上を呼び捨てにするとは、どんな家庭で育ったのかね？」

私はムツとしてその女性に尋ねた。するとその女性は表情を変えずに、

「品川の次は？」

と言って来た。ああ、何だ、私を呼び捨てにしていたのではないのか、と得心が行ったが、それはそれで何とも奇妙な話だ。

「大崎だろう」

私は女性に興味湧き、ちょっと付き合ってみる事にした。

それが大きな間違いだったと気づくのは、それから間もなくのことである。

「五反田」

「目黒」

「恵比寿」

「渋谷」

「原宿」

「代々木」

私は山手線は今までの人生で数え切れないほど乗っている。

だから、全駅言えるのだ。

だが、この女性はどうしてこんな事をしているのだろうか？

やがて、駅名は終着に近づいた。

「浜松町」

「田町」

女性が最後の駅を言って、山手線一周の旅は終わった。

「楽しかったよ」

私は立ち去ろうとした。するとその女性は私の前に立ちはだかり、

「クイズに勝ち抜いた方には、賞状を差し上げます」

といきなり大きな紙を差し出した。それは高価な和紙で作られたもので、達筆な字で書かれた立派なものだった。

「あ、ありがとう」

私は戸惑いながらも礼を言い、賞状を受け取った。すると女性はニツと笑い、

「それから、副賞として私とデートができます」

「えっ？」

私は彼女にいきなり腕を組まれ、耳まで赤くなった。

この歳になって、こんな若い女性に腕を組まれるとは思いもしなかったからだ。

ちよつと変わった娘だが、美人だし、悪い子ではなさそうだ。

私は彼女に合わせる事にした。

「どこに行くのかね？」

「決まってるでしょ、山手線三周の旅よ」

「……」

彼女はけたたましく笑った。

デートの行く末が思いやられる。

私は逃げた方が良かったのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8490i/>

続・山手線の女

2011年10月5日01時36分発行